九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『とりかへばや物語』四の君密通事件続攷

辛島，正雄
九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/16298

出版情報：文獻探究. 4, pp.35-44, 1979-06-03. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

『とりかへばや物語』四の君密通事件続攷

――『源氏物語』摂取について――

辛島正雄

はしがき

別稿(1)で述べたように、浮舟密通事件の二人の男の板挟みとなって苦悩する女の姿というパターンの変形として、四の君密通事件は展開していたが、浮舟密通事件が浮舟の匂宮との二度目の逢瀬を綿密刻明に象り、以後、刻々と緊迫の度を加える状況を描破してゆく、「水も漏さぬ緊密な構想の下に、極めて密度の高い文体、比類のない的確な表現を以て、浮舟の悲劇を展叙する」(2)と評されるごとき方向には、まったく向かわせていない。四の君と宰相との二度目以降の密会についてはその詳細を省き、三四ヶ月後の四の君の懐妊に話は続けられるのである。これは、明らかに、浮舟密通事件からの乖離である。そして、何度もの逢瀬→懐妊という点では、女三の宮密通事件的展開になっているのである。

以下、本稿では、別稿を承けて、四の君密通事件のその後の展開を、『源氏物語』と対比しながら追ってゆくことにし、やや派生的な事柄にも、若干触れておこうと思う。

1

女三の宮の懐妊は、そのことだけでは、彼女が不義を犯したことを源氏に知られる根拠たりえない。冷泉帝が藤壺と源氏の間の不義の子だということを桐壺帝は生涯知らなかったという例もある。ところが、四の君の懐妊は、中納言との夫婦生活では絶対にありえぬことであるから、ただちに四の君の不貞を証することになる。ここに、妻の不貞を知った夫の反応という、ひとつの見所が予想されるのであるが、中納言はこの事実をどう受けとめたか。そのなによりの特異性は、怒りが湧かないということであろう。

（中納言ハ四ノ君ニ）しのびがたきふしぐしばかりをうちほのめかして、わが心のうちにも、「いづくをうらみどころにかは」と、心ながらもをかしうおぼゆるに、いみじう心動くほどの心やましさはなきなるべし。（46ペ）(3)

中務の乳母から四の君懐妊を知らされた直後にも、十

二行にわたる長い心中思惟がある（44～45ペ）が、源氏や薫の感じたような怒りも憤懣もないのである。こんな莫迦げた事件が起こるのも、もとはといえば、自分が女でありながら、男姿でいつまでも交わっていたからだ、と、思いは自らに跳ね返ってくる。これは、桑原博史氏もいわれるように、「中納言が正しき男でないために、裏切った人々を責めるより、まず自分自身の劣等感にさいなまれてしまうからであろう」（4）。本来女性であり、しかもその身の世づかぬことを常に思い嘆いてきた中納言が、男としてのプライドもある源氏や薫のような感情を抱いては、それこそ異様というものであろう。

こうして、当然のことながら、中納言と四の君の仲は、急速に冷めてゆく。四の君は、すべてわが身の罪と思うと、つらく、「いかで消え失せ、身をなきになしてしがな」（49ペ）とばかり思うが、深窓育ちのお姫さまにそんなことのできる道理もない。東国育ちの田舎娘である浮舟が「わが身ひとつの亡くなりなんのみこそめやすからめ」（「浮舟」巻(6)176ペ）（5）と死を思うときでさえ、「児めきおほどかに、たをたをと見ゆれど、気高う世のありさまをも知る方少なくて生ほしたてたる人にしあれば、すこしおずかるべきことを思ひ寄るなりけむかし」（(6)177ペ）という評言が添えられる、それほど自殺の願望とは異常なのである。密通という共通項で深い影響関係にあった四の君と浮舟だが、一連の展開からすれば、このわが身を失ってしまおうという思いのあたりで、ひとまずゆきつくところまできたと考えられよう。なぜなら、四の君が、出自からしても、到底自殺できるとは思えない以上、これ以後の両者は、似せようにも似せようがないからである。そして、まだ死ほど強くはないが、この世を厭い離れたいという暗い切実な思いは、四の君にではなく、中納言の中に胚胎する。すなわち、「なぞや、いとうき世の中に、せめてながらふべき」（49ペ）と。浮舟の運命は、四の君から中納言へと静かに矛先を転じてゆくわけであるが、そのことについてはまた後で述べることにする。

さて、物語は、この中納言の思いに対応するかのように、新たに吉野の宮を登場させ、中納言の吉野訪問が語られるが、いまは触れない（6）。

中納言が吉野の宮を訪れている間、宰相は、これをよき隙と、夜ごと四の君に逢う。四の君も、「心うしと思ふ方はかたとして、これこそはまことに深きこころざしなめれと、思ひ知られ行く」（69ペ）のであり、逢うたびごとに宰相にのめり込んでゆく四の君の様子（意地悪くいえば、逢った回数と愛情の深さとの相関

関係）がよくわかる。ほんとうに深い愛情といういい方には、多分にほんとうの〈男〉という含みがあろう。「かたみに涙にまつはれつゝ、たち別れたまふ夜な夜な」（69ページ）とあるように、すでに相思相愛の相を帯びているのである。

結局、中納言の帰京後も、夫婦の間の溝は深まるばかり、なんら好転の材料もなく、巻一は閉じられる。

2

巻二に入ると、ただちに四の君の出産のことが語られる。

四の君は無事女児を出産した。ところが――

すべてたがふところなく、たゞ宮の宰相なるちごの御かたちなるに、（中納言ハ）さればよとうち見るに、胸つぶれて、云々　（72ページ）

井上君江氏は、この趣向が、藤壺から産まれた男皇子（冷泉帝）が源氏そっくりだったという「紅葉賀」巻に似ているとされる(7)。しかし、考えてみれば、罪の子がその実父に瓜二つだという趣向自体は、発想からいっても至極当然のことであり、それが影響関係にあるか否かは、明白な詞章の一致か、文脈の類似でもない以上、安易に認めることは許されまい。もちろん「紅葉賀」巻の著名な一節が作者の脳裏に泛ばなかったとは思えないが、頭の中にあるということと実際に利用するということとは、別問題であろう。そこで、「紅葉賀」巻とは別に、ここに先蹤を求めるとすると、むしろ『狭衣物語』巻二の女二の宮が狭衣の子を出産する件りの方がふさわしいと思う。

珍しき人まづ見奉らせ給ふに、ただ大将（狭衣）の御同じ顔にて、誠にうつくしき御様なるを、（大宮ハ）「こは何処なりし人ぞ。あなあさましし」と思さるるに、云々　（上）323ページ）（8）

『狭衣物語』との関係は、構想から見ても、女（四の君、女二の宮）が誰かわからぬ男の種子を宿したが、産まれてみて、その容貌から、紛れもなくあの男（宰相、狭衣）だとわかった、という類似を見せるのであり、ある程度の投影は認められよう。要は、ここで中納言が産まれた女児の容貌が宰相に生き写しなのを見て、以前からの疑い（49ページ。そこで中納言は、宰相の不審な様子から、四の君に通じた張本人だろうと推測していた）に確証を得たという文脈を度外視して、罪の子の容貌が実父に瓜二つという共通点のみで類似を見ようとするのは、いささか強引にすぎるのではないかということである。

さて、右に続く部分には、明らかに『源氏物語』を摂り入れている。次にその個所を対照して掲げる。

（中納言ハ）さればよとうち見るに、胸つぶれて、うとき人にだにあらで、昔より隔つる事なく、かたみにまつはれたる人にしも、いかにあやしとも、をこがましとも思ふらんと、恥づかしく心うきに、胸いたきまで思ひあまり、子持ちの君、いみじかりつる事のなごり、綿などうちかづき、ところせげにくゝみ臥せられて寝たまへるに、さし寄りて、「ものけたまはる」とある声に、うちおどろきて見上げたまへれば、たゞなる時だにいみじう恥づかしげに、おぼろけの人見えにくきを、まいて思ふ心あり、うちほゝ

さても、（匂宮ハ）知らぬあたりにこそ、さるすき事をものたまはめ、昔より隔てなくて、あやしきまでしるべしてゐて歩きたてまつりし身（薫）にしも、うしろめたく思し寄るべしや。

（「浮舟」巻(6)166ページ）

（源氏ハ）人々すべり隠れたるほどに、（女三ノ）宮の御もとに寄りたまひて、「この人をばいかが見たまふや。かかる人を棄てて、背きはてたまひぬべき世にやありける。あな心憂」とおどろかしきこえたまへば、顔うち赤

笑みて、「これはいかゞ御覧ずる。

この世には人のかたみのおもかげをわが身に添へてあはれとや見ん」

とのたまへる恥づかしげさに、なに事かはいはれたまはん。顔を引き入れたまへるもことわりなりや。

（72ページ）

前半は、匂宮が浮舟と通じていたことを知ったときの薫の気持である。中納言と宰相との関係が薫と匂宮との関係に酷似していることは、従来説かれてきた(9)通りで、大雑把にいえば、「まめ」と「すき」と、対蹠的な性格の、世人も認める好敵手（ライヴァル）、というわけである。そして、二人が人より親しくつき合っていることも一致し、「すき」者が「まめ」人の妻（隠し女）を犯すことも共通である。したがって、親友が自分の妻（隠し女）を寝取っていたことを知ったときの男の気持にある程度似通ったものが現われることは、容易に予想できるだろう。

めておはす。

「誰が世にかたねはまきしと人問はばいかが岩根の松はこたへん

あはれなり」など忍びて聞こえたまふに、御答へもなうて、ひれ臥したまへり。ことわりと思せば、強ひても聞こえたまはず。（「柏木」巻(4)314～315ページ）

ここで両者に共通するのは、間男が、こともあろうに（圏点をつけた「しも」のニュアンス）、「昔より隔」てなくつき合ってきたあの男だったとは、という思いである。中納言は、前からしきりに間男の見る目を気にしていた（45・46・47ページ）が、犯人が宰相であるとわかり、いっそう恥ずかしい気持になる。それは、中納言が女であるため、ストレートに怒りを発することができず、相手が自分の正体を嗅ぎつけはしまいかという不安が克ってしまうせいである。歴とした男である薫は、匂宮の裏切りに非難の気持を抱いている。当然である。ここでの類似は大した重みはない。むしろ、異なる思いにゆき着くところにこそ注意すべきだろう。

後半は、一場面そっくり倣ったものである。若君の五十日（いか）の祝いに、若君を抱いてその顔をながめるにつけ、さまざまな感慨の去来する源氏は、尼姿になってしまった女三の宮のそばに寄り、囁きかける――その場面である。もはや細かく対応関係を吟味・確認するまでもなく、じつに瞭然たる場面摂取であるが、それでも、表現を通じてそこに形象・定着されるものにはおのずと違いの出てくること、いうまでもない。

中納言の態度は、「ものけたまはる」ということばが図らずも象徴しているように、他人行儀であり、四の君にとっては、「恥づかしげ」な気のひける相手以外のなにものでもない。かつては〈虚像〉の愛情に充足していた感のある二人だが、四の君が〈実像〉に直面するや、〈虚像〉の愛情は二もなく敗退を余儀なくされる。今や二人の間にあるのは気まずい思いばかり、〈虚像〉である限り、再び愛情の甦る見込みはない。中納言自身、そのことを一等自覚しているはずで、わが身のことを思うだけであり、四の君に対する一片の思いやりも、湧こうにも湧いてこないのである。「うちほゝ笑みて」とあるように、中納言のやり口は、陰険でいやらしい。歌も直截で非難がましい。もっとも、表現の論理には、微塵の狂いもない（なにせ、すばらしいお手本があるのだ）。ただ、そこから浮かび上がってくる中納言の姿に、有利な立場に胡座をかいたような、なんとも人間離れした冷酷さを感じてしまうのだ。責任の所在はすべて四の君にあり、無用の苦労などしたくないといわんばかりの。男とも女ともつかぬ、宙ぶらりの中納言の位置のしからしめるものであろうが。

これに比べて「柏木」巻はどうだろう。女三の宮を責めている風ではあるが、同時に、源氏自身のいいしれぬ心の呻きのようなものが感じられはしまいか。相手を傷つけるとき、返す刃で自らも傷つかざるをえな

いといった態の。人生の秋におこった不祥事であり、ひとり秘密を胸にしまっておこうとする源氏の複雑な思いは、想像するだにあまりある。あらゆる艱難辛苦を舐めつくしたような源氏の内面の深さは、中納言の若さ（この時点でまだ十七ないし十八歳）とは、本来比べられようはずもない。それをあえてこの物語の作者は摂り入れた。結果、中納言が思いあまって、少しばかり四の君をいじめるという形に落ち着いた。わたしにはすべてお見通しなのだ、といわんばかりで。だが、これはこれで、なんの異和感もなく、物語の必要を満たしているのである。「いでやさはれ」（72ページ）、四の君のことなどどうとでもなれという気持、いくら中納言が人並優れた人物であっても、この年で人生の機微や叡智を知っていては、かえっておかしかろう。それに、これまで自分なりに最善の努力を惜しまなかった中納言に、責任を感じねばならぬいわれは、毫もないのだ。まして、源氏の女三の宮への断ち切れぬ愛執にいたっては、無用の長物である。「柏木」巻の場面の複雑沈痛な情感を捨象し去った趣とでもいえようか。

続く七日の夜の産養のとき、ちょっとした椿事（ハプニング）がもちあがる。この夜四の君に忍んで逢いにきた宰相が、中納言に動かぬ証拠をおさえられるというへまをするのである。ここには、宮田和一郎氏が指摘された（10）ように、『源氏物語』「賢木」・「若菜下」両巻の投影が考えられる。具体的な文章の対比は、すでに土岐武治氏が行っておられる（11）ので、ここではその表現効果について考えてみると、「賢木」巻では、源氏の朧月夜との情事の現場を父右大臣に発見されるという、きわめてスリリングな場面を展開するのであるが、ここにさほどの緊張感があるとは、とてもいいがたい。宰相は証拠の品を残してさっさと逃げている。「賢木」巻の効果――朧月夜がいざり出て場を取り繕おうとする、ところが男ものの帯がまといついている、それを右大臣が見咎め、と、連鎖的に発見が重なってゆく――とは、雲泥の差がある。「若菜下」巻での手紙が、扇・畳紙という、ついさきほどまで男が身につけていたより生々しいものに変ったというにすぎず、構想上もここが密通露見のクライマックスとなるわけでもなく、女に男が通っていたことがばれるときの類型（宮田氏も指摘される、『狭衣物語』巻二、狭衣が落として行った懐紙で大宮が女二の宮に誰かが通じたことを知る件り〈(上)293～294ページ〉や、下っては、『我身にたどる姫君』巻四、帝が後涼殿女御の過ちを権中納言からの手紙を発見して知る件り（12）等参照）をご丁寧に踏襲したのではないかと疑いたくなる。もっとも、作者

としては、「賢木」・「若菜下」両巻の場面を合体した新趣向の場面を描いてみせるという野心があったのかもしれないが、結果は逐二兎者不獲一兎というべく、平板であり、困惑せざるをえない。そもそも、邸内が客でいっぱいのときに宰相が四の君に逢いにやってくるという設定自体が、強引で不自然なのである。源氏の場合も確かに無理な算段で密会を続けたわけだが、そこでの心的必然性に比べると、読者には、無分別無思慮な、女を抱くことしか興味のない、好色一本の放蕩児と、それにのめり込む、小心なくせに男好きの莫迦な女、とぐらいにしか映らないのではないか。それほど、描写も内容も浅薄なのだ。ただし、そのような形象化が作者の狙いなら話は別だが、おそらく、筆力の不足が原因なのだろう。宰相という人物は、全体にかなり戯画化されて描かれていることも事実だが、ここについては、本来かなりシリアスであるべきところが、いたるところ隙間だらけになったものと思しい。

あきれた宰相の行動を知った中納言の気持は、「いみじうねたかるべきことのさまなれど、さしもおぼえず」（75ページ）とある。嫉妬は愛情の裏返し、四の君に愛着を感じない以上、むやみに腹をたてるのも阿呆くさい。心配するのは、今や名実ともに第一人者である自分のプライドに疵がつくこと。結局、「遊びやなにやかやとあれど、いたうもてはやさず」（76ページ）と、祝いのポーズもとれなくなる。源氏も、世間向きの盛儀につけて、「御心の中に心苦しと思すことありて、いたうもてはやしきこえたまはず、御遊びなどはなかりけり」（「柏木」巻(4)290ページ）と、管絃の遊びも中止する。右大臣家の婿である中納言には、したくなくとも催しを変更させる力はないから、管絃の遊びにも気の乗らない風情であると変ってくるわけである。

3

以上をもって、私が「四の君密通事件」と称する部分は終る。以下は、宰相が尚侍（中納言の兄）に迫り、続いて、物語最大の見せ場ともいうべき、中納言が正体を見破られる場面へと連接し、いよいよ急転回に佳境へと入ってゆくわけである。（この構成上の区切りを、作者は省筆という形でつけている。）

さて、四の君密通事件として再現した「浮舟物語」は、四の君が浮舟と相似た道を辿れなくなった辺りから、その運命が中納言に転移されているらしく、中納言失踪事件にそれは明らかである(13)。とすると、浮舟に相当する人物は途中で変ることになるが、物語の展開としては、一続きに「浮舟物語」の影響下にあることになる。この変形された「浮舟物語」摂取につい

ては、すでに鈴木弘道氏が概ね説いておられる(14)ので、まずそれを引用しておこう。

式部卿宮の子に宰相中将という者がいたが、この中将は、匂宮のごとく色好みとして描かれ、かねて懸想していた四の君と密通する。これは、あたかも浮舟を中に薫と匂宮が相争う姿に似ているが、宇治十帖では、浮舟が宇治川投身という自己否定によって解決せんとし、とりかへばや物語では、かえって四の君の夫中納言(女)が隠遁の気持を強め、さらに、中納言(女)までが中将に犯され、妊娠するに至って中将に連れられ宇治に身を隠すのである(一文略)。この中納言(女)失踪事件は、浮舟失踪事件を焼き直したものと考えられるから、浮舟は、四の君として再現した後、新たに中納言(女)としても再現しているわけである。中将に密通された四の君が、みずから打解策を講じて投身とか失踪するならば、浮舟とほとんど変らないが、この物語を源氏物語などには見られない変成男女の登場で始め、その一人の中納言(女)を四の君と結婚させるという奇想を練ったことが、結局、四の君ならぬ中納言(女)をしてこの世を激しく厭わしめ、失踪させる源となったようで、作者は源氏物語と全く異なった着想を抱きつつも、やはり源氏物語に拘束されて、読者に浮舟説話を想起させずにはいられない、その変形場面を構成することになったのであろう。

中納言失踪事件は、四の君密通事件に比べると、変形の度が甚だしいだけに、「浮舟物語」のあからさまな摂取は少ないが、次のような中納言を浮舟に見たてたごとき部分も散見する。

中納言が乳母の里に籠っているとき、宰相が訪ねてきて、二人で情痴の限りを尽しているところに、

かたはなるまで起き臥し遊びたはぶれて、云々
(巻二94ペ)

とあるのは、浮舟と匂宮との二度目の逢瀬——川向うの隠れ家での惑溺の二日間について、

かたはなるまで遊び戯れつつ暮らしたまふ。
(「浮舟」巻(6)147ペ)

とあるのに拠ったものと思われる。

臨月も近づき、人中に交わっていられるのもあと僅かという中納言の心境を、

年さへ返りぬれば、羊の歩みの心地して、云々
(巻二102ペ)

と表現しているのは、自殺を決意した浮舟の、

明けたてば、川の方を見やりつつ、羊の歩みよりもほどなき心地す。
(「浮舟」巻(6)185ペ)

とある心境と、まことによく似ている(15)。(宮田氏に指摘あり。)

また、宇治脱出を決意した中納言について、

さりげなく、むつかしげなる反古、ひきやりやき、などしたまひて、云々　(巻三158ページ)

とあるのは、死を前にした浮舟について、

むつかしき反故など破りて、おどろおどろしく一たびにもしたためず、燈台の火に焼き、水に投げ入れさせなどやうやう失ふ。(「浮舟」巻(6)177ページ)

とあるのを簡略にしたものだろう。(宮田氏に指摘あり。)

中納言という人物は、この物語における主人公であり、当然のことながら、最も精彩ある性格描写がなされている。女の身でありながら男として社会に出た彼は、その超人的な資質により名声を克ち得た。思慮深く慎重で、いたずらに周囲の状況の力関係におし流されるようなことはない。したがって、そうあからさまに浮舟の悲劇が写しとられる条件にあるとはいいにくい。それにもかかわらず、中納言失踪に関しては、「浮舟物語」が想起されずにはいられないのである。とすると、それはおそらく、自殺ないし失踪という一点に向って不可避的に進まざるをえない、それ以外の道はありえない、といった、構造上の類似がもたらす効果なのであろう。運命は、中納言の深慮をもってしても、いかんともしがたい苛酷さなのである。

鈴木氏は、中納言失踪への「浮舟物語」の投影を、そうあらずともよいところが『源氏物語』に呪縛された結果だと考えておられるようだが、はたしてそうであろうか。私にはむしろ、性の転換という、およそ伝統的な物語の世界には不釣合な設定の中に、あくまで伝統的な作風を維持しようとする、作者のかなり主体的な意図が働いているように思われる。散逸してしまった『古とりかへばや』では、異様な設定と伝統的な手法とのかね合いということからすれば、新奇さを表現として十分に安定しえなかったものらしい。その皺寄せは、当然女中納言に露呈してくるはずで、『無名草子』等の断片的な記事からも、中納言は同情しがたい人物であり、失踪や出産に絡んで、かなり非現実的な事柄も描かれていたようで、奇抜な設定を活しきれない古本作者の昏迷を見るようである。こうした『古とりかへばや』の跡を承けただけに、この物語では、その辺りの経緯がまことに自然である。作者は、『源氏物語』から離れておのれ独自の世界を展開してみせようとしているわけでは、さらさらない。むしろ「源氏」的世界に近からしめようとしているというべきだろう。「浮舟物語」は、中納言失踪にある程度の悲劇

性を賦与するための、貴重な見取図なのである。決して、あらずもがなの、『源氏物語』に束縛された結果のものではない。

むすび

平安朝後期の物語（下って中世の擬古物語についても）は、『源氏物語』の呪縛を逃れられない矮小作品群といわれることが多い。が、その内実というものは、個々の作品についてのつぶさな検討を経た上でなければ、いまだ十分に解明されたとはいえまい。本物語が「浮舟物語」を大きく摂り入れていることにしても、密通された四の君が投身や失踪をするのではなく、夫の中納言の方が後に失踪するようになるというように、変形現象が見られる、といっただけでは、要領を尽していないようで不備が多いのである。四の君についてはほとんどそのままといった類似があるのに、中納言についてはどこをどうと具体的に指摘できるところなどまずないのである。この極端な差を黙って見過すわけにはゆくまい。煩雑な作業だが、読解・注釈の基礎としても、地道な解明の努力が必要だろう。そして、しかるのちに、作品研究へと飛躍したいものである。

（一九七九年五月稿）

（注）

（1）「『とりかへばや物語』における『源氏物語』摂取――四の君密通事件の場合――」（「語文研究」47号 昭54・6）。

（2）今井源衛「人妻を盗む話――浮舟巻補注――」（「国語と国文学」昭51・6）。

（3）『とりかへばや物語』の引用は鈴木弘道『校注とりかへばや物語』（昭51）に拠る。

（4）講談社学術文庫『とりかへばや物語(上)』（昭53）。

（5）『源氏物語』の引用は「日本古典文学全集」本（六冊）に拠る。

（6）吉野の宮の紹介から中納言の吉野訪問にかけては、「橋姫」巻を中心に宇治十帖の影が色濃い。さしあたっては（7）など参照。

（7）「『とりかへばや物語』にみられる『源氏物語』の影響――趣向の類似について――」（「立教大学日本文学」17号 昭41・11）。

（8）『狭衣物語』の引用は「日本古典全書」本（二冊）に拠る。

（9）藤岡作太郎「とりかへばや」（『国文学全史 平安朝篇』〈明38〉所収）。

（10）「とりかへばや物語」（『物語文学攷』〈昭18〉所収）。また、清水泰「とりかへばや物語考」（「立命館大学法文学部文学科創設記念論文集」昭16・6）にも的確な指摘がある。

（11）「とりかへばや物語における源氏若菜下の影響」（「解釈」昭50・1）。

（12）金子武雄『物語文学の研究』（昭49）所収本310～311ページ。ここは「若菜下」巻の模倣。なお、金子氏の梗概によると、306ページ、權中納言が後涼殿に忍び込んだ際、二人の間にはなにもなかったように解しておられるが、ここはやはり密通があったと見るべきである。

（13）石川徹「正編と対比して見た続編宇治十帖の性格」（『古代小説史稿』〈昭33〉所収）に「浮舟失踪の構想も、身を隠すとか人に盗まれるとか、少しく襖子を変へて、浜松・寝覚・狭衣・取替婢等に盛んに用ゐられた」とされるのが、最初の指摘であろうか。

（14）「後代物語への影響」（『源氏物語講座8 諸本・源泉・影響・研究史』〈昭47〉所収）。

（15）鈴木弘道「とりかへばや物語と狭衣物語」（『平安末期物語の研究』〈昭35〉所収）では、ここの典拠について、『狭衣物語』巻二の、

常よりもいと悩ましく暮れ行くを、羊の歩みの心地して、さすがに物心細く思さるるを、云々

と「浮舟」巻の例とを引いて、「三つの文章を比較すれば、とりかへばや物語の文章は、狭衣物語の文章を参考にしたのではないかと思はれる」と述べておられるが、そう簡単に割り切ってしまうのはいかがであろう。確かに表現は「羊の歩みの心地して」と一致するのであるが、さらにその表現の用いられた文脈を考えてみる必要があるのではなかろうか。女二の宮は狭衣に犯されて懐妊、いま病悩しているわけで、その心細い心境を屠所に牽かれる羊の歩みに譬えたのである。したがって、浮舟と中納言の、一日一日の時間の経過がすなわち死ないし失踪への一歩一歩であるという切迫感とは、おのずとその趣を異にしているのである。私としては、やはり「浮舟物語」との関連からも！ここは「浮舟」巻に拠ったものと考えたい。